

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2022年 8月 19日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 理学研究科

職 名・学 年 博士後期課程・3年

氏 名 池田 悠吾

助成の種類	令和4年度・国際研究集会発表助成			
研究集会名	第19回国際コウモリ学術会議			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()			
発表題目	Reverse Colonization of Bats from the Japanese Archipelago to the Eurasian Continent			
開催場所	北アメリカ・テキサス州・オースティン			
渡航期間	2022年 8月 6日 ~ 2022年 8月 15日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000 円		
	使用した助成金額	250,000 円		
	返納すべき助成金額	0 円		
	助成金の使途内訳	費 目	金 額 (円)	
		航空費	332,500	
		(内250,000を充当)		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)			

成果の概要 / 池田 悠吾

大会概要

国際コウモリ学術会議 (International Bat Research Conference, 以下 IBRC) は、コウモリ類を対象とした研究の国際的な発展を目的に 1968 年から開催され、近年は 3 年毎に開催されている。開催年毎に各国の異なるコウモリ関連学会が主催し、今回の第 19 国際コウモリ学術会議 (19th IBRC)・第 50 回北アメリカコウモリ研究シンポジウム (50th North American Symposium for Bat Research) は北アメリカコウモリ学会 (North American Society for Bat Research) が主催した。期間はアメリカ現地時間の 2022 年 8 月 7 日—13 日にわたる 7 日間であった。口頭発表 292 件、ポスター発表 78 件、賞受賞者らによる特別講演 7 件、シンポジウム 12 件、ワークショップ 17 件、Broacken Cave におけるコウモリ観察会、オースティンにおけるコウモリ研究施設見学ツアーなど、多くの内容が盛り込まれた大会であった。発表内容は全てコウモリもしくはコウモリを宿主とする寄生虫や細菌、ウイルス等を対象としており、発表分野は生物保全学・環境学・都市景観学・群集生態学・個体群生態学・病理生態学・生理学・遺伝学・進化生物学・系統学・系統地理学・行動学・野生動物管理・形態学・ゲノミクス・生態生理学・健康科学・生物多様性学・免疫学音声モニタリング・発生学・マクロ生態学と非常に多岐にわたった。5 大陸から 600 人を超えるコウモリ研究者が集い、活発な意見交換を行うことができた。

IBRC2022 大会参加報告

「Reverse Colonization of Bats from the Japanese Archipelago to the Eurasian Continent」という演題で口頭発表を実施した。学生による発表は口頭・ポスターどちらも 8 月 9 日に集中して開催された。口頭発表は、発表内容毎に 4 つのセッションに分けられ、発表者当たり 15 分が与えられ、参加者はそれぞれ興味のあるセッションへ赴く形式であった。ポスターセッションのコアタイムは奇数・偶数番号に別れ、それぞれ 1 時間ずつが設けられた。私の発表は群集生態学を主としたセッションに組み込まれ、当日の最後の発表者であった。他の 2 つのセッションはすでに終わっていたため、比較的多くの研究者に発表を聞いてもらうことができた。学生の口頭発表者はほとんど英語を母国語とするネイティブスピーカーであり、アジア人の発表者は私だけであった。私以外の 5 人の日本人参加者を含め、英語が苦手なアジアや欧州、南米の学生の多くはポスター発表を行っていた印象を受けた。口頭発表はポスター発表よりも多くの研究者に発表を聞いてもらえる一方で、相手の顔や名前が分からないデメリットがある。そのため私は、発表後に相手から話しかけてもらえるように明るく接し易い発表を試みた。その結果、発表後の 4 日間で多くの研究者に声を掛けられ、国際的な研究者ネットワークの構築につなげることができた。今年度に博士号を取得し、来年度から若手研究者となる予定である私にとって、大変貴重な機会となった。

私は、2019年にタイ・プーケットで開催された第18回国際コウモリ学術会議にも参加したが、前回大会と比較した際、本大会の特徴として風力発電設備の増加に伴うバットストライクやコウモリ類の群集構造に与える影響を評価する研究や、非常に致死率が高いコウモリ特有の病原菌である白鼻症候群（white-nose syndrome）の研究に関する発表が非常に多く見られた。これは、本学会が北アメリカで開催され、大会参加者の半数以上が米国の研究者かつ彼らと共同研究を実施している各国の研究者であることが関与していると考えられた（現在、欧米では政府による積極的な風力発電設置が進められている；白鼻症候群はニューヨークを起点に北アメリカ大陸全土に感染拡大している）。私は英語能力に自信があるが、ネイティブなスピードの英語による異分野の発表内容を完全に理解するのは大変難しく、毎日大変な集中力を要した。

コロナ禍に開催された本学会であったが、対策がしっかりされており、発表以外のコーヒープレイクやワークショップ等、懇親を深める時間が十分に設けられており、前回大会よりも多くの研究者と深く知り合うことができた。特に、開催会場から徒歩10分ほどの場所にあるCongress Avenue Bridgeは、メキシコオヒキコウモリの集団営巣地として有名で、毎日夕暮れ時には多くの参加者が出巢の様子を見学しに訪れ、会場内とは異なる環境で交流を深める絶好の場となった。当該場所には学会参加者だけでなく、一般市民や観光客も多く訪れていた。日本ではコウモリに対してネガティブな印象が持たれがちであるが、オースティンではポジティブな印象が持たれているようであり、土産品にコウモリがあしらわれたものも散見され、観光資源としても重宝されていた。

私が研究する系統地理学および分子系統学・形態学分野の発表は少数であったが、他分野の最新の研究成果を知ることができ、非常に興味深かった。国際学会ではどうしても同じ人種で集まってしまう傾向があるが、本大会では日本人やアジア人参加者が少なかったこともあり、欧米のコミュニティにおける積極的な会話ができた。今後のポスドクとしての共同研究の話も進めることができ、これまでの研究成果の報告だけでなく、これからの研究展開の計画立案ができた。私の研究者人生の大きな転機となりうる、非常に有意義な機会となった。本大会参加にあたり助成をいただいた京都大学教育研究振興財団に、心より感謝申し上げます。